オスカー・ワイルドの世界

The World of Oscar Wilde

期間：2009年10月30日～11月13日
場所：実践女子大学香雪記念館1階展示室

主催：実践英文学会
共催：実践女子大学・実践女子短期大学公開講座委員会

『オスカー・ワイルドの世界』展

＊展示の概要

『オスカー・ワイルドの世界』展では、本学所蔵の本間文庫より、オスカー・ワイルド関係の資料約50点を展示する。本間文庫は、英文学者・文学博士の本間久雄本大学名誉教授（1886-1981）の死後、遺族から寄贈されたワイルド・コレクションが基礎となっており、オスカー・ワイルドの著作・研究書、及び英米文学に関する幅広い資料が収められている。収録資料については、『オスカー・ワイルド文献目録』（1989）が実践女子大学図書館により作成されている。

＊パンフレットについて

パンフレットの作成にあたり、以下の文献を参照した。ワイルドの著作の邦題及び人物名については、『オスカー・ワイルド辞典－イギリス世紀末大百科』の表記に統一した。

Beckson, Karl. *The Oscar Wilde Encyclopedia*. New York: AMS Press, 1998.

Goodman, Jonathan, comp. *The Oscar Wilde File*. London: Allison & Busby, 1988.

Hart-Davis, Rupert, ed. *The Letters of Oscar Wilde*. London: R. Hart-Davis, 1962.

Holland, Merlin, ed. *Oscar Wilde: A Life in Letters*. London and New York: Fourth Estate, 1988.

山田勝　『オスカー・ワイルドの生涯－愛と美の殉教者』日本放送出版協会、1999。

山田勝編『オスカー・ワイルド辞典　—イギリス世紀末大百科—』北星堂、 1997。

オスカー・ワイルド『ワイルド喜劇全集』荒井良雄編　新樹社、1976。

オスカー・ワイルド『ワイルド悲劇全集』荒井良雄編　新樹社、1986。

＊凡例

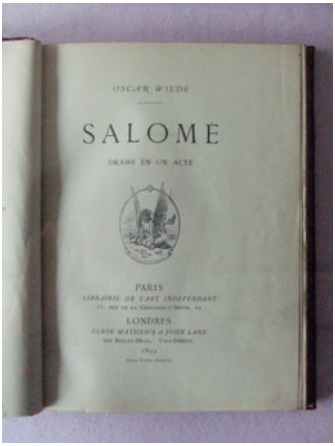
パンフレットの表記については、以下の通りである。

展示番号　『邦題タイトル』
原文タイトル
出版地：出版社、出版年

『サロメ』（*Salome*）特集

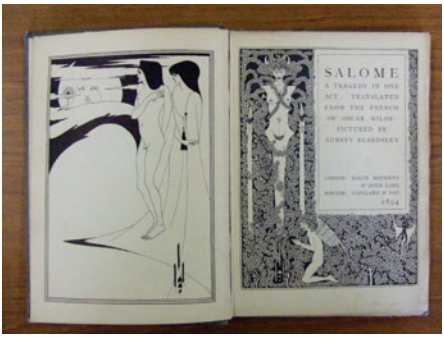
1891年パリで執筆されたワイルドの傑作。1896年パリで初演。1892年に初演のはずだったが、聖書の中の人物を登場人物にすることを禁止され上演中止になる。聖書の「マタイ伝」第14章と「マルコ伝」第6章にあるサロメの物語を題材にした、唯美主義的傾向の最も強い1幕悲劇。

1.『サロメ』
Salomé: drama en une acte.
Paris: Librairie de l'Art Indépendent, 1893.



本書は初版本。最初はフランス語で書かれた。ワイルドは「あの微妙な楽器であるフランス語を芸術のために使った私の最初の冒険」と述べている。

2.『サロメ』
Salome: A Tragedy in One Act.
London: E. Mathews & J. Lane, 1894.



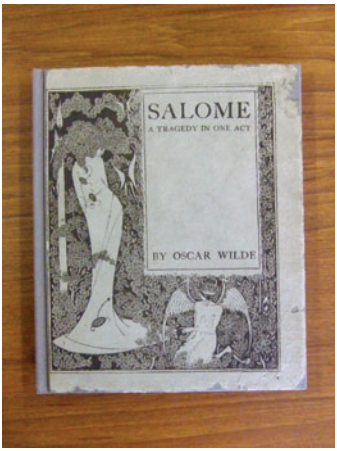
オーブリー・ビアズリー (Aubrey Vincent Beardsley 1872-98) の挿絵が入ったアルフレッド・ダグラス卿 (Lord Alfred Bruce Douglas 1870-1945) による英訳初版本。ビアズリーの挿絵入りのこの版は『サロメ』を一躍有名にし、『サロメ』はビアズリーのお陰で有名になったと考える人もいれば、ビアズリーは『サロメ』のお陰で有名になったと考える人もいる。

訳者はダグラスであるが、ワイルドはこの作品の冒頭で下記のように記し、本書をダグラスに献上している。

TO MY FRIEND
LORD ALFRED BRUCE DOUGLAS
THE TRANSLATOR OF
MY PLAY

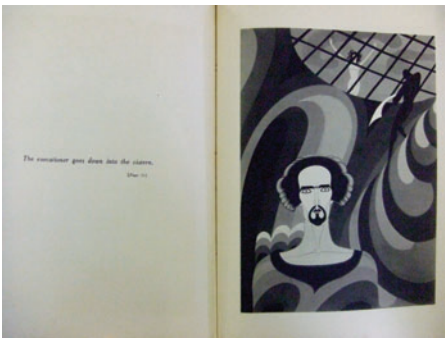
3. 『サロメ』
Salome: A Tragedy in One Act Translated from the French of Oscar Wilde.
London: John Lane, 1911.

本書はビアズリーのイラストを表紙に用いた小型サイズの版。



4. 『サロメ』
Salome: A Tragedy in One Act.
New York: E. P. Dutton, 1927.

本書は John Vassos のイラストが入った英語版。白と黒のみが使われたデッサンの多くは、人物を中心としながらも広々とした空間と奥行きが特徴的なラインで描かれている。



5. 『サロメ』
Salome: A Tragedy in One Act. New York: Heritage Press, c1945.

本書は、ダグラスの翻訳に、Holbrook Jacksonの解説が加わり、更にValenti Angeloのイラストの入った版。解説ではワイルドの身辺を始め、『サロメ』の解説や、この作品がどのように受け入れられてきたかなどが説明されている。原色を美しく且つ奇抜に使ったイラストもビアズリーのとは違って興味深い。

6. 『サロメ』
Salomé. London: The Folio Society, 1957.

オスカー・ワイルドの次男ヴィヴィアン・ホランド(Vyvyan Holland 1886-1967)が英訳した最初の版。水色に色付けされた版画が差し込まれている。また、登場人物名も青い文字で標記されている美しい装丁の本である。

ワイルドの遺髪・墓地

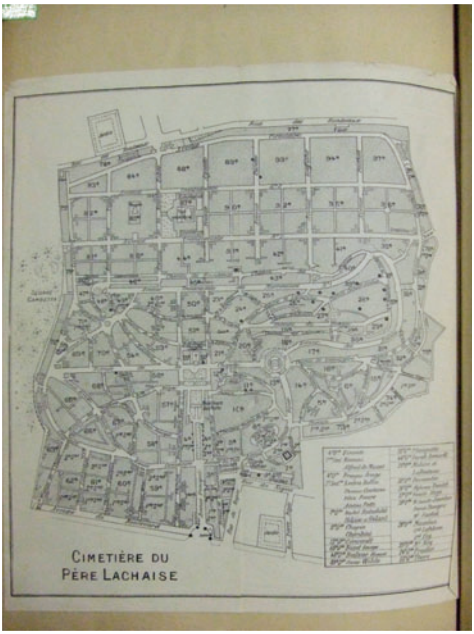
7．ワイルドの遺髪

ワイルドの次男ヴィヴィアン・ホランドより、故本間久雄教授に贈られたもの。遺髪を入れた封筒の表紙にホランド自筆の以下のような極め書きがある。

Oscar Wilde's hair cut off by Mr. Robert Ross after his death.
3 p.m., 30th 1900.

8．ワイルドの墓地の地図

ワイルドは死後、パリ郊外のバーミューに埋葬されたが、1909年にパリ市外のペール・ラシェーズ墓地に移された。89番地にワイルドの墓石がある。



9．ワイルドの墓石

ペール・ラシェーズ墓地にあるワイルドの墓石と、墓石を彫刻した彫刻家ジェイコブ・エプスタイン (Sir Jacob Epstein 1880-1959) の写真。エプスタインの彫刻が完成したのは1912年で、縦2.5メートル、厚さ1メートルほどの大理石製の壮大な作品。墓石には、『レディング獄舎のバラッド』*The Ballad of Reading Gaol* の第4部の最後の4行が刻まれている。

And alien tears will fill for him
  Pity's long-broken urn,
For his mourners will be outcast men,
  And outcasts always mourn

そして異邦人の涙があの男のために
　哀れみという久しく壊れた甕を満たすであろう
彼を悼む者は追放された人であろうし
　追われた者は常に悼むものだから

ワイルドの書簡

ワイルドの手紙は、現に残されているだけでも莫大な数が記録されている。残された手紙にはワイルドの友好関係や、喜怒哀楽、内面の変化、作家としての活動などが記録されている。

10.　Mortimer Menpes 宛の手紙

16 Tite Street, Chelsea

My dear Menpes, I send you a copy of my little book, which I hope you will accept as a small proof of the admiration I have in you as an artist, and the pleasure I have in you as a friend. For delicacy, fancy, and refinement, we have no painter who is your equal, and I hope that some day I may have something from your hand to adorn and make delightful some books of mine.

Yours

Oscar Wilde

[訳]

16 タイト・ストリート、チェルシー

親愛なるメンピス、私の駄本をお送りします。芸術家としてのあなたに私が抱いている敬慕と、友人としてのあなたに私が抱いている喜びのちょっとした証拠として受け取って頂けたらと思います。繊細さといい、趣味といい、洗練さといい、あなたに匹敵する画家はおりません。いつか、あなたに装飾をお願いして私の本を美しいものにして頂けることを切望しております。

敬具

オスカー・ワイルド

Mortimer Menpes (1855-1938) について

ワイルドの芸術観の研究に欠くことのできないイギリス人画家。ワイルドと親交が深くワイルドの第2子の洗礼式で教父を努め、名付け親となっている。メンピス はオーストラリアに生まれ、ロンドンで活躍。明治期に来日し、京都や大阪での光景を描いたことで知られている。

この手紙では、ワイルド自身の作品の意匠や挿絵をメンピスに依頼したい、という気持ちが強く出ているが、結局それは実現しなかった。本間久雄は、この手紙の日付を第2子が生まれた直後であろうと推測している。

11.　Charles Spurrier Mason宛の手紙

16, Tite Street, Chelsea, SW

My dear Charlie, Will you lend me your copy of the 'Duchess of Padua' like a good fellow? I have not got one.

Yours
Oscar Wilde

[訳]

16 タイト・ストリート、チェルシー、SW地区

親愛なるチャーリー、お願いだから君の『パデュア公爵夫人』を貸してもらえないだろうか？僕の手元にないのだよ。

敬具
オスカー・ワイルド

Charles Spurrier Mason (1868-1940) と *The Duchess of Padua* について

メイソンは同性愛者で、同じく同性愛者のアルフレッド・テイラーと男娼宿を開設し、1892年には彼と結婚式を挙げている。第1回ワイルド裁判で名前が挙げられた人物でもある。*The Complete Letters of Oscar Wilde* には、1894年8月の静養先ワージングからメイソンに宛てた2通の手紙が収録されている。

作品『パデュア公爵夫人』 *The Duchess of Padua* はアメリカの大女優メアリ・アンダースンを念頭に置いて1883年3月に完成したワイルドの2つ目の悲劇。初演は1891年1月21日。ワイルドの名前を伏せてニューヨークで、"Guido Ferranti"という演題で行われた。同作品の初出版は劇場用の私家版20部（4部現存確認）で、ワイルドは出版社 John Lane と Elkin Mathews に Bodley Head 版での出版を希望する手紙を1894年の9月に複数出していることが確認されている。またその手紙に、ワイルドは『パデュア公爵夫人』の草稿を見たことがない、と書いている。

この手紙の内容は、メイソンが所有する『パデュア公爵夫人』の書物の借用を依頼するという簡単なものであるが、『パデュア公爵夫人』の出版は正式には1908年のことであり、借用依頼した書物が、劇場用の私家版なのか、あるいはBodley Head 版の草稿なのか、いまひとつ不明である。また、ワイルドさえ所有していないものを何故メイソンが持っていたかも不明である。

テイラーとワイルドが出会うのは1892年10月のことであり、またワイルドが住所の Tite Street に住居を構えていたのは、1884年から破産による借財返却のために売却した1895年4月24日まで（ワイルドは同年4月5日に男色事件のために逮捕）であることから、手紙の書かれたのは少なくともその間であると推測できる。手紙の内容から判断してワージングから帰郷した1894年秋以降に書かれたものではないかと思われる。

12.　Carlos Blackerに宛てた手紙

Hôtel d'Alsace

My dear Carlos, I am very sorry to trouble you again, but I have received no money this month and if you could let me have fifty francs it would be an inestimable service.

I have heard nothing from Frank Harris at all, and Mr. Hargrove makes difficulty about paying my quarterly allowance for three months, which is unjust. It began to on May 19th 1897, and should be always paid on corresponding date, should it not?

Bobbie is trying to manage it, but in the meanwhile I am without a penny.

Sincerely

Oscar

[訳]

オテル・ダルザスにて

親愛なるカルロス、再三に渡り申し訳ありませんが、今月は全く収入がなく、もし私に50フラン貸して頂けましたら計り知れないほどの助力となります。

フランク・ハリスからは何も連絡はありませんし、不公平なことに、ハァグロウブ氏は年4回の引当金を3ヶ月間支払うことに異議を唱えているのです。これは1897年5月19日から始まったもので、決められた日に支払われるべきものなのですが。

ボビーが何とかしようとしてくれていますが、しばしの間私は文無し状態になっているのです。

敬具

オスカー

Carlos Blacker (1859-1928) について

ブラッカーは、イギリス人でありながら、生涯のほとんどをヨーロッパで過ごしている。彼は特にフランスに滞在し、「ドレフュス事件」に興味を持って関係し、記録している。ワイルドは『幸福な王子』をブラッカーに捧げている。ブラッカーはワイルドとフランスで出会い、1891年の3月に彼をシェラードとゾラに引き合わせている。また、1893年1月に『ウィンダミア夫人の扇』の印税の利子を自分が保管している旨をワイルドに知らせている。ワイルドの出獄後も交際は続くが、アルフレッド・ダグラスとの交際が続いていることを知り、やめるように忠告する手紙を書くも、ワイルドが返事を出さなかったことで、交際は事実上終了したとされている。

この手紙をワイルドが出した後、ブラッカーは小切手を送り、ワイルドの経済危機を救っている。

13.　Jefferson 宛の手紙

Dear Mr. Jefferson
I am very anxious to see your Rip-van Winkle again if there is a box vacant on Friday. Might I have the privilege of using it.
I hope to see you again and to talk of Corot.

Very truly,
Oscar Wilde

[訳]

ジェファソン様
　もし金曜日に座席があれば、あなたの『リップ・ヴァン・ウィンクル』をぜひもう一度観たいと思っております。席を取っていただけたら、大変光栄に存じます。
　またお目にかかり、コローについて語り合うのを楽しみに致しております。

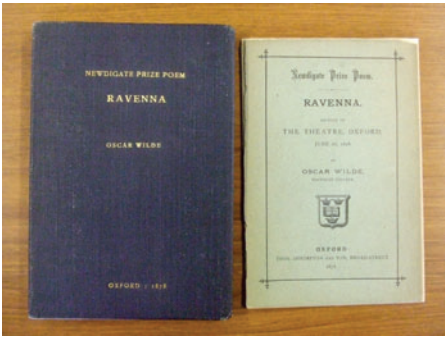
敬具
オスカー・ワイルド

Joseph Jefferson (1829-1905) について
　ジェファソンはフィラデルフィア出身の俳優で、喜劇俳優として名を馳せた。ワシントン・アーヴィング原作の『リップ・ヴァン・ウィンクル』*Rip Van Winkle* が代表作。

Jean-Baptiste Camille Corot (1796-1875) について
　コローはフランスの風景画家でエッチング版画家。新古典主義アーティストとして賞賛されているが、印象派画家に影響を与えた画家である。タッチの美しさと奥行きのある風景画に加え、人物画もルネサンス時代を連想させるかのような色使いで描いている。コローは1825年から計3度イタリアへ旅行し、イタリアの詩情ゆたかな風景画の影響を受けている。

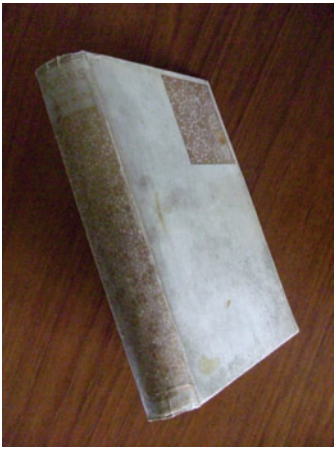
ワイルドの詩

14. 『ラヴェンナ』
Ravenna. Oxford: Thos. Shrimpton, 1878.



1877年、オックスフォード大学在学中のワイルドは、1875年と1877年の2回にわたって、ダブリンのトリニティ時代の恩師マハフィー教授らとイタリアを旅している。『ラヴェンナ』は、2回目の旅行の際に立ち寄った、イタリア北東部にある都市ラヴェンナを歌った詩である。この都市にはダンテの墓があり、バイロンも暮らしたことがある。ワイルドは1878年にこの詩でニューディゲイト賞を獲得、オックスフォードのシェルドニアン講堂で自ら朗読、喝采を浴びた。

15. 『詩集』
Poems. London: D. Bogue, 1881.

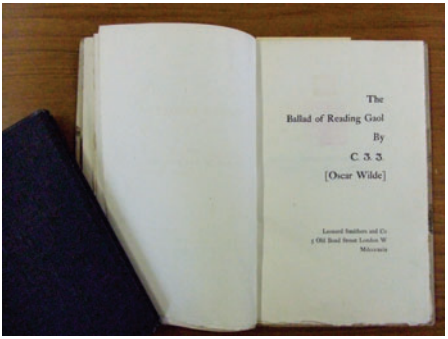


1881年に自費出版された初の詩集で非常な評判となった。幼くして亡くなった妹の思い出に書かれた「レクイエスカット」“Requiescat”、ワイルド自身が一番気に入っているとし、ロンドンのテムズ川とギリシャ風景の対比の中に芸術家の苦悩を歌った「イティスの苦悩」“The Burden of Itys”、科学の時代にあって「美の精」に仕える芸術家の葛藤を表現した「エロスの庭」“The Garden of Eros”などが収録されている。

16.『スフィンクス』
The Sphinx. London: E. Mathews and J. Lane, 1894.

オックスフォード時代に書き始め、1883年にパリで大部分を書き上げたが、その後も修正を加え、ようやく1894年に出版された。ワイルドの数多くの作品のイラストと装丁を手がけたチャールズ・リケッツ (Charles Ricketts 1866-1931) とチャールズ・シャノン (Charles Shannon 1863-1937) がデザインを担当。行頭の文字を緑の小文字で、イラストを赤で印刷し、レイアウトを左右非対称とするなど、1890年代の感受性をよく伝える極めて美しいデザインとなっている。ちなみに、ワイルドの晩年まで、良き理解者であり友人としてワイルドを支えたアダ・レヴァソン (Ada Leverson 1862-1933) を、ワイルドはスフィンクスという愛称で呼んでいた。

17.　『レディング獄舎のバラッド』
The Ballad of Reading Gaol.
London: L. Smithers, 1898.



1897年8月24日、パリで書き上げられた654行にわたるこのバラッドは、翌年2月13日に、ワイルドがレディング監獄に服役していたときの囚人番号C.3.3. (C棟3階3号室) の名前で出版された。ワイルドの名前は第7版で併記された。レディング監獄で1896年に絞首刑にかけられたC.T.ウルドリッジをモデルとしたもので、死刑制度の残酷さや監獄生活の悲惨さが描かれている。第4章の最後の4行は、ペール・ラシェーズ墓地のワイルドの墓に刻まれている。

18.『カルミデス　その他』
Charmides and Other Poems. London: Methuen, 1913.

「カルミデス」はワイルド自身が最良とする詩。アテネの神殿の女神の像を愛したために女神の怒りに触れ溺死したカルミデス、そのカルミデスに恋をした少女を歌ったもの。この詩集には、『詩集』*Poems* (1881) に収録された「カルミデス」のほか、「レクイエスカット」など、主なワイルドの詩が集められている。

19.　『娼家』
The Harlot's House: A Poem.
London: Imprinted for Subscribers at The Mathurin Press, 1904.

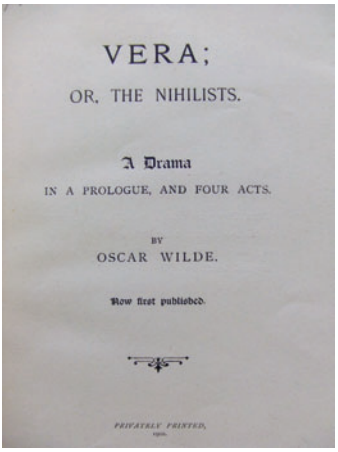
「娼家」は1885年に書かれ、街頭風景を素描し、娼家で踊る男女の姿を歌った詩である。この版は、オルセア・ジャイルズ (Althea Gyles 1868-1949) による美しい5点のイラストがつけられた限定版である。アイルランド出身の画家、詩人、装丁家であるジャイルズは、W. B. イエイツの詩集の装丁で知られている。

20.　『「牧神」及び「絶望」』
Pan: A Double Villanelle and Désespoir: A Sonnet. Boston: J. W. Luce, 1909.

ワイルドの生前出版されなかった二つの詩が収録されている。

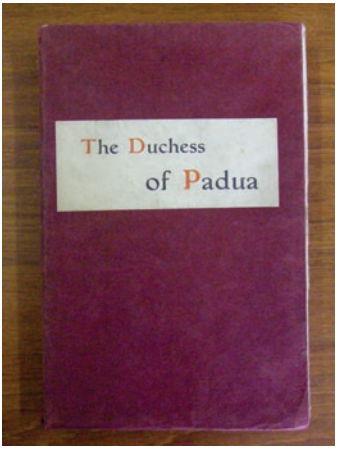
ワイルドの演劇

21.　『ヴェラ、実は虚無主義者達』
Vera: or, the Nihilists. Privately printed, 1902.


VERA;
OR, THE NIHILISTS.
A Drama
IN A PROLOGUE, AND FOUR ACTS.
BY
OSCAR WILDE.
Now first published.
PRIVATELY PRINTED,

1883年初演。ワイルドの処女作。プロローグと4幕で構成されている悲劇。ワイルドはこの劇の上演を2年前から計画していたが、ロシア皇帝の暗殺により延期され、更に新聞などの不評もあり、上演期間は1週間ほどであった。本書は初版本。副題の『虚無主義者達』にある通り、帝政ロシアの虚無主義達の活動が中心となって物語が展開する。ヴェラという宿屋の娘で虚無党へ身を投じた女と、専制君主の息子でありながら自由を愛して虚無党に参加した皇太子との恋を中心に、事件はメロドラマ風に、迫力をもって展開する。

22.　『パデュア公爵夫人』
The Duchess of Padua. New York: Privately printed, [1905].

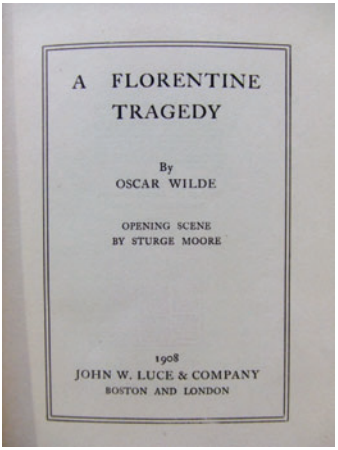


1891年初演。ワイルドの第二作目の5幕悲劇。本書は、出版年が記載されていないが、1905年に個人で出版されたものと思われる。ワイルドが絶賛したアメリカの女優メアリ・アンダスンを念頭に置いて、シェイクスピアをまねた無韻詩で書かれた。ワイルドは、アンダスンに宛てた手紙の中で、「この劇が私の全文学作品中の代表作であり、私の青春の傑作であるというのに何のためらいもありません。」と付している。しかし、アンダスンは作品が気に入らず、上演を見合わせた。以後、ワイルドは「自分を楽しませるために劇を書く」ことにしている。

亡き父が殺害されたことを聞かされ、復讐のためにパデュア公爵の家で奉公をすることになったグイードと、グイードに心を奪われたパデュア公爵夫人の禁断の恋を巡ってストーリーが展開する。

23. 『フィレンツェの悲劇』
A Florentine Tragedy. Boston and London: John W. Luce, 1908.

1895年頃執筆されたとされるがダクラスとの同性愛不祥事に巻き込まれて、未完のまま放置された1幕悲劇。ワイルドは、死ぬ間際までこの作品を完成させる意欲を持っていたが未完成のまま放置された。1908年のワイルド選集が出版された時が初出版。本書はその初版本。


A FLORENTINE
TRAGEDY

By
OSCAR WILDE

OPENING SCENE
BY STURGE MOORE

1908
JOHN W. LUCE & COMPANY
BOSTON AND LONDON

24. 『ウィンダミア夫人の扇』
Lady Windermere's Fan: A Play About a Good Woman. London: Elkin Mathews and John Lane, 1893.

1892年初演。4幕喜劇。1891年に『善良な女』というタイトルで執筆を始めた。思うように進まなかったが、ウィンダミア湖のそばの別荘で引きこもって2、3週間で完成させた。『ウィンダミア夫人の扇』と改変するや大成功を収める。本書はその初版本。

「過去のある女」アーリン夫人が自分の母であることを知らないウィンダミア夫人は、アーリン夫人と自分の主人の仲を疑った為、家庭に風波が立ってしまうが、アーリン夫人は母であることを隠したまま、娘であるウィンダミア夫人の危機を救うという問題劇風の筋立てになっている。

25.　『なんでもない女』

A Woman of No Importance. London: Elkin Mathews and J. Lane, 1894.

1893年初演。4幕喜劇。この劇に登場するイリングワース卿は、まるでワイルドの代弁者のように逆説と機知に富んだセリフを連発する。脇役もユーモアとウィットにあふれたセリフを連発する。本書は初版本。

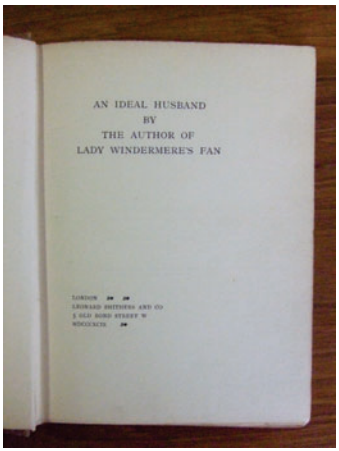
18歳の貧しい娘に子供を生ませながら、地位と名誉のために結婚を拒否した男イリングワース卿と、その子を育て上げるのにすべてをかけた「過去のある女」アーバスノット夫人が、父とは知らずにイリングワース卿の秘書になろうとしている息子のジェラルドを、取り合って対決するという設定である。

26.『理想の夫』

An Ideal Husband. London: Leonard Smithers, 1899.

1895年初演。4幕喜劇。初日にこの劇を観たウェールズの王子に気に入られ、長い劇にもかかわらず「一言も除去しないでほしい」と言われた。政界汚職にからむ恐喝と、それがもとになって起こる夫婦間の愛情のシーリアスな事件を中心に組み立てられている。本書において、ワイルドの名前は作者名として記載されておらず、The Author of Lady Windermere's Fan と紹介されている。

チルターン卿が秘密を売って富を築いたことをチェヴァリー夫人が暴こうとする。これにより、チルターン夫人の抱いていた「理想の夫」は破壊され夫婦生活は危機に直面するが、ダンディで機知に富んだゴーリング卿の力添えで何とか丸く収まり、全ての騒ぎがハッピーエンドに繋がる。


AN IDEAL HUSBAND
BY
THE AUTHOR OF
LADY WINDERMERE'S FAN

27. 『まじめが肝心』

The Importance of Being Earnest: A Trivial Comedy for Serious People. London: Leonard Smithers, 1899.

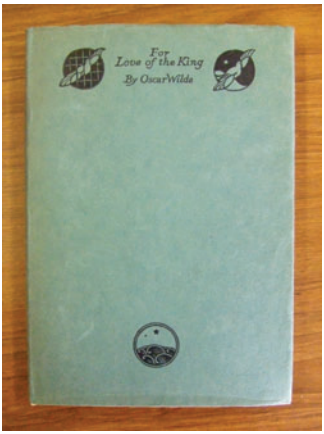
1895年初演。3幕喜劇。コリンズ版では4幕構成になっているが、この版では3幕構成になっている。「真面目な人のためのくだらない喜劇」という副題がある。本書において作者名は Oscar Wilde ではなく、The Author of Lady Windermere's Fan となっている。

登場人物全員がユーモアに満ちていて、セリフも機知に富んでいる。主人公ジャックはグウェンドレンと恋愛関係にあるが、アーネストという名前の人との結婚を望んでいたと聞かされ、アーネストに改名しようとする。ジャックの友人アルジャノンはジャックの後見人セシリーを好きになってしまうが、セシリーはジャックの弟のアーネストに思いを寄せていることを語る。混乱の後、最後は2組のカップルがめでたく結ばれる。

28. 『王の愛』

For Love of the King. London: Methuen, 1922.

1894年初演。ワイルドが友人チャン・トゥーン (Mrs. Chan Toon) の為に書いた3幕構成の仮面劇。初演の時には 'A Burmese Masque'という副題も付いていた。作品は広く出回らなかった上、「ワイルドの作品だとされている偽物」と述べた人もいる。この作品は出版用に創作したわけではなく、1894年かそれより少し前に作成されたが、初出版されたのは1922年のことであり、本書はその初版本。

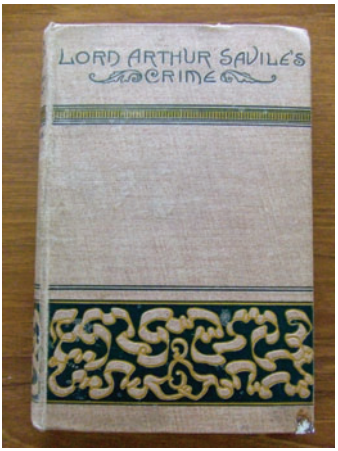


ワイルドの散文

29. 『幸福な王子とそのほかの物語』
The Happy Prince and Other Tales. London: D. Nutt, 1888.

「幸福な王子」、「ナイチンゲールとばら」 “Nightingale and the Rose”、「わがままな大男」 “The Selfish Giant”、「忠実な友」 “The Devoted Friend”、「すばらしいロケット」 “The Remarkable Rocket”の5編を収録。ウォルター・クレイン (Walter Crane 1845-1915) とG. P. ジェイコム＝フッド (George Percy Jacomb-Hood 1857-1929) がイラストを担当。表題作「幸福な王子」は、王子とその使者となるつばめの姿を通して真の愛とは何かを問いかける童話。好評を博し、ワイルドの恩師ウォルター・ペイター (Walter Pater 1839-94) もワイルドに激賞を送った。初版。

30. 『アーサー・サヴィル卿の犯罪とそのほかの物語』
Lord Arthur Savile's Crime and Other Stories. London: J. R. Osgood, 1891.



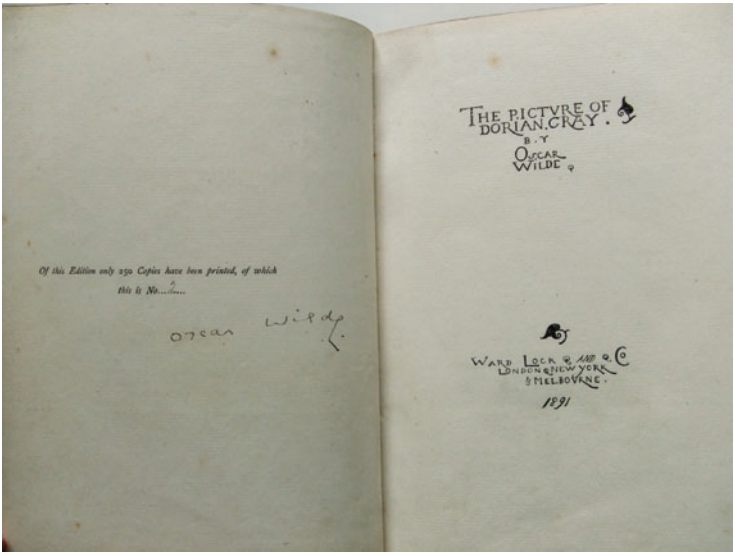
「アーサー・サヴィル卿の犯罪－義務の研究」 "Lord Arthur Savile's Crime: A Study of Duty"、「秘密のないスフィンクス」 "The Sphinx Without a Secret"、「カンタヴィルの幽霊」 "The Canterville Ghost"、「模範的な大金持ち」 "The Model Millionaire"収録。表題作「アーサー・サヴィル卿の犯罪」は1887年5月『コート・アンド・ソサエティ・レヴュー』*Court and Society Review* に掲載された。手相占い師から「殺人を犯す」と予言された卿は、シビルという女性との結婚の前に殺人を遂行することを決意する。何度かの失敗の後、偶然河岸で出会った件の占い師を河に投げ込み、とうとう殺人を遂行する。義務を果たした卿は幸せな結婚生活を送るのであった。犯罪の計画を立てる卿の姿が騎士道精神と重ねられ、寓話的に描かれている。社交界の描写なども盛り込まれた初期の傑作。初版。

31. 『リピンコッツ・マンスリー・マガジン』
Lippincott's Monthly Magazine: vol. 46, July 1890. Philadelphia: J. B. Lippincott, 1890.

『ドリアン・グレイの肖像』初出の雑誌。ワイルドがアメリカ講演旅行の際に会ったジョゼフ・ストダート(Joseph Stoddard 1845-1921) が、自身が企画した月刊誌を成功させるために、ワイルドと、『緋色の研究』を既に発表済みだったアーサー・コナン・ドイル(Arthur Conan Doyle 1859-1930) の二人にミステリー物の長編小説を連載して欲しいと依頼したことにより『ドリアン・グレイの肖像』が誕生した。ちなみにコナン・ドイルが連載したのがシャーロック・ホームズ物の長編第二弾『四つの署名』である。

32.『ドリアン・グレイの肖像』
The Picture of Dorian Gray. London: W. Lock, 1891.

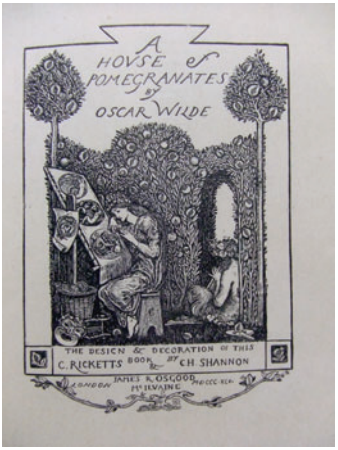
ワイルド唯一の長編小説。『リピンコッツ・マンスリー・マガジン』に全編13章が掲載された後、新たに序文と6つの章を加え、最終章を2つに分割した計20章からなる改訂版として出版された。美青年ドリアン・グレイは悪の道に走るが、いくら悪事に手を染めようとも、彼を描いた肖像画が醜くなるばかりで、彼自身は若く美しい姿のままだった。しかし、とうとう肖像画の醜さに耐え切れなくなり、絵にナイフを突き刺したところ、彼自身が死んでしまった。翌朝、使用人たちは、若く美しい姿のドリアンを描いた肖像画の横に、醜く年老いた老人の死体を発見するのであった。官能美にあふれた傑作。初版。限定版250部の1冊で、見返しにワイルドの直筆のサイン入り。



33.『石榴の家』

A House of Pomegranates. London: J. R. Osgood, 1891.

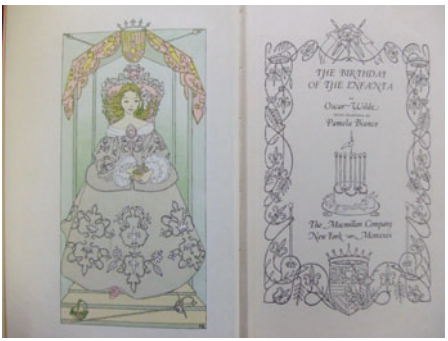
「若い王」 “The Young King”、「王女の誕生日」 “The Birthday of the Infanta”、「漁師とその魂」 “The Fisherman and His Soul”、「星の子」 “The Star-Child”の4編を収録した、ワイルドの第2童話集。人間の無知、弱さ、残酷さ、悲惨さが華麗な言葉で描かれている。チャールズ・シャノンがデザインとイラストを担当している。初版。



34.『王女の誕生日』

The Birthday of the Infanta. New York: Macmillan, 1929.

第2童話集『石榴の家』に収められた「王女の誕生日」のみを独立して出版したもの。スペインの宮殿で育った王女と、粗野で醜い小人の物語。パメラ・ビアンコ(Pamela Bianco 1906-94)によるイラストが印象深い。



35.『漁師とその魂』
The Fisherman and His Soul and Other Fairy Tales. Murray Hill: Farrar & Rinehard, c1929.

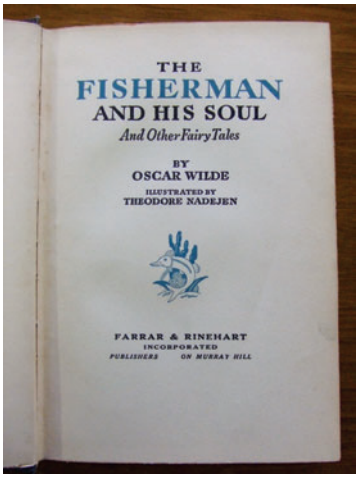
第1童話集『幸福な王子とその他の物語』及び第2童話集『石榴の家』に収められた短編のうち、「漁師とその魂」「若い王」「星の子」「ナイチンゲールとばら」「わがままな大男」「王女の誕生日」「幸福な王子」を収録。表題作は漁師と人魚の愛を描いた物語。

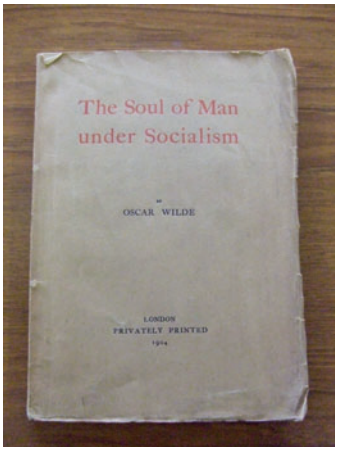
36.『インテンションズ』
Intentions. London: J. R. Osgood, 1891.

「虚言の衰退」"The Decay of Lying"、「ペン・鉛筆・毒薬」"Pen, Pencil and Poison"、「芸術家としての批評家」"The Critic as Artist"、「仮面の真実」"The Truth of Masks"を収めた評論集。いずれの評論もワイルドの芸術観をよく表している。初版。

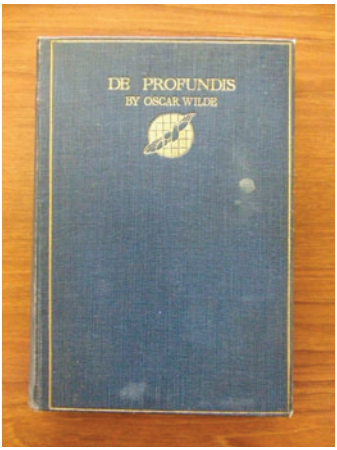
37.　『社会主義下の人間の魂』
The Soul of Man under Socialism. London: Privately printed. 1904.

1891年2月に『フォートナイトリー・レヴュー』*Fortnightly Review* に発表された。個人主義を基調とする人生・芸術・社会主義が主題。





38. 『獄中記』
De Profundis. London: Methuen, 1905.



原題は旧約聖書詩篇第130章第1節「深い淵の底から」の意味のラテン語。アルフレッド・ダグラス卿との同性愛事件で有罪判決を受け服役しているときに書いたダグラス卿宛の書簡集。私的な事柄の告白であると同時に、ワイルドの人生観・宗教観・芸術観が述べられ、ワイルドの心の変遷を映し出す記録でもある。ワイルドの死後、私的内容を削除し出版。

39. 『セバスチャン・メルモス』
Sebastian Melmoth. London: A. L. Humphreys, 1905.

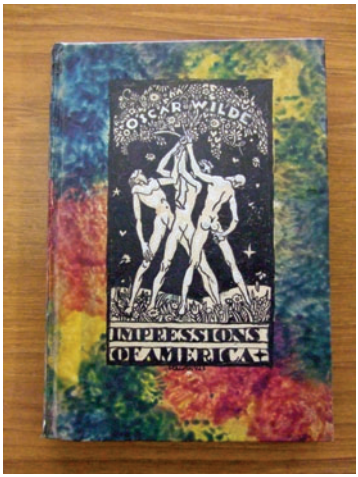
セバスチャン・メルモスとは出獄後暮らしたフランスでワイルドが使用していた仮名。メルモスという名はワイルドの母方の義理の大伯父C.R.マチューリン(Charles Robert Maturin 1782-1824) 作『放浪者メルモス』*Melmoth the Wanderer* (1820) の同名の主人公から取られたもの。セバスチャンの由来については明確ではないが、3世紀ローマのキリスト教殉教者、聖セバスティアヌスに因むとされている。この本は死後出版された文学全集の中に含められ、ワイルドの作品から選りすぐった警句と『社会主義下の人間の魂』を収録している。

40. 『批評集』
Essays, Criticisms and Reviews. London: Privately printed, 1901.

「魅力的な本」 “A Fascinating Book”、「とある現代の詩人に関する覚書」 “A Note on Some Modern Poets”、「ある文学に関する覚書」 “Some Literary Notes”、「文学及びその他のことに関する覚書 」 “Literary and Other Notes”を収める。いずれもワイルドが編集長を務めた『ウーマンズ・ワールド』*The Woman's World* に収録された書評及び評論。

41. 『アメリカの印象』
Impressions of America. Sunderland: Keystone Press, 1906.

1883年9月24日にウォンズワース・タウン・ホール (Wandsworth Town Hall) で行った講演を収める。ワイルドは作家としてデビューする前はアメリカでの講演で生計を立てていたが、「アメリカの印象」は講演旅行の際のアメリカの印象についてイギリスで行った講演。スチュアート・メイソン (Stuart Mason 1872-1927) が序文で当時の報道を引用しているが、それによると、この講演の際ワイルドは「イヴニング服にオレンジ色のシルクのハンカチーフを胸に入れていた」という格好で登場し、「ほんの一、二回、メモを見るか見ないかで、なめらかにそして時には歌うように話した」そうである。

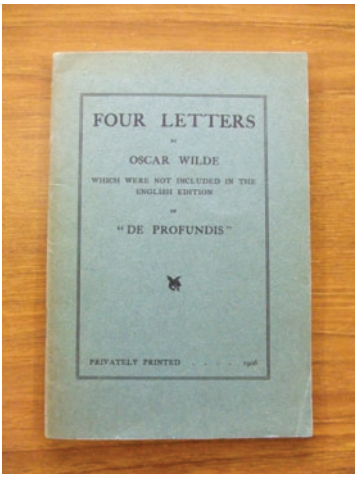


42. 『アフター・レディング』
After Reading: Letters of Oscar Wilde to Robert Ross. Westminster: C. W. Beaumont, 1921.

出獄した後の1897年夏、滞在先のフランスから友人ロバート・ロス (Robert Ross 1869-1918) に書かれた手紙を収める。最初の手紙は5月28日付けで、ベルヌヴァル (Berneval) のオテル・ドゥ・ラ・プラージュ (Hotel de la Plage) で書いたもの。このベルヌヴァル滞在中に『レディング獄舎のバラッド』を執筆している。しかし次第にベルヌヴァルでの生活に倦み、この年の9月上旬にはベルヌヴァルを離れる。収められている最後の手紙は同年9月4日付け。恐らくこの最後の手紙の直後にベルヌヴァルを離れたものと推測される。

43. 『４つの手紙』
Four Letters by Oscar Wilde: Which Were Not Included in the English Edition of "De Profundis." Privately printed, 1906.

『獄中記』には収められなかった、ダグラス卿宛の手紙を収録。ワイルドから『獄中記』の原稿を渡されたロバート・ロスは、ワイルドの死後、まず内容を大幅に削除した『獄中記』をドイツ語で刊行し、ほぼ同時期の1905年、イギリスにおいて、少しだけ内容を増補した『改訂版獄中記』を刊行した。どちらの版においてもダグラス卿宛の書簡は削除されたのだが、これは卿に対する怨みつらみが述べられていた文書であり、紛争を恐れたロスが削除したのであった。『獄中記』は1949年、ワイルドの次男ヴィヴィアン・ホランドによる序文つきが出版され、1962年にハート・ディヴィスの編集によりようやく完本となった。



オスカー・ワイルド関連資料

44. 新聞（雑誌）切抜帖　第一集

　ワイルド研究・コレクションの第一人者スチュアート・メイソン による、新聞・雑誌・劇場パンフレット等をスクラップした切抜帳17冊のうちの1冊。1881年から1888年までの文壇、劇壇の記事、長短合わせて80余点が収められている。

45. 新聞（雑誌）切抜帖　第二集

　44と同じく、メイソンによる切抜帳の1冊。ワイルドの死後、新聞等に掲載された記事、ダグラス卿の写真、埋葬された墓地の地図、墓石の写真など、貴重な資料が収録されている。

46. 『オスカー・ワイルド書誌』
Mason, Stuart. *Bibliography of Oscar Wilde*. London: T. Werner Laurie LTD., 1914.

　スチュアート・メイソンによる、オスカー・ワイルドの書誌。本間文庫所蔵の資料は、このメイソンによる整理番号によって整理されている。

＊解説執筆

英文学科

遠藤花子 (助教)

土屋結城 (専任講師)

佐々木真理 (准教授)

＊執筆にあたっては、『サロメ』特集・書簡・演劇を遠藤が、散文を土屋が、詩・関連資料を佐々木が担当した。

『オスカー・ワイルドの世界』

2009年10月29日　印刷
2009年10月30日　発行

編集　実践英文学会
発行　実践英文学会

発行所　東京都日野市大坂上４－１－１
実践女子大学文学部　英文学科研究室内
実践英文学会